

同志社田辺校地と

その周辺地域の自然と歴史



田辺天神山遺跡の竪穴住居址群（三世紀）

出席者（ABC順）

大学文学部教授	笠井昌昭
大学文学部教授	森浩一
大学工学部 専任講師	中川要之助
人文科学研究 専任研究員	仲村研
大学法学部教授	小野哲
人文科学研究 専任研究員	杉井六郎
大学工学部 教授	横山卓雄
（司会） 本部職員 校地学術調査 委員会調査主任	鈴木重治

鈴木 前に、「同志社校地を掘る」ということで今出川校地を中心に座談会をもたしていただいたわけですが、今回は田辺校地を中心したいと思います。

この程私も校地学術調査委員会が大学の整備計画委員会からの依頼を受けて、校地のなかの遺跡の分布並びに一つの地点の発掘調査をさせていただく機会を得たわけです。たまたま田辺では、大学の教育研究条件を改善してい

く、さらに充実していくという形で整備計画が進められているわけですが、この計画を進めるに先立って、埋蔵文化財の分布並びに事前の発掘調査を要請されるということで、調査したわけです。

この調査について簡単に紹介してそのあと、それぞれのご専門の立場から先生方にご所見をご披露していただき、あわせて幾つかの問題についてお話いただければというふうに思っています。地質、文献史学、考古学、それから小野先生は田辺に非常にお詳しい方がありますし、それぞれのご発言をもとに、ご自由に発言いただければありがたいというふうに考えているわけです。

ところで田辺校地には天神山遺跡、下司古墳群、大御堂裏山古墳などがすでに知られているわけですが、分布調査では、天神山遺跡の周辺から校地全体を歩くという形でかなり細かく歩かしていただいたわけですが。現在のところ、十四カ所の地点で遺物の散布を認めています。奈良時代以後、各時代のものがあるわけですが、とくに中世に関しておもしろい遺物が、若干の土塁とか濠などをもって確認されています。発掘調査では、十六世紀の

半ばに中心をもつ資料が出土しておりまして、たとえば中国渡来の青磁だとか備前とか常滑とか焼物のたぐいが多いわけですから、中世史上貴重な資料が出土しているわけですね。

従来の考古学の成果をみますと、南山城全体を考えていく上でも、重要な遺跡が同志社の校地のなかにあると考えられるわけですし、周辺の地域を含めて先生方の従来の研究成果をご披露したいと思っています。

そこで、校地学術調査委員会の発掘調査に並行する形で、地質班の横山先生、中川先生に地質図の作成をお願いして、もうすでに完成しておりますので、この地域の地質並びに南山城の地形を含めまして自然的な環境と申しましょうか、そのあたりからまず材料を出していただけないでしょうか。

南山城の自然環境

中川 田辺地域といえますと、京都盆地というよりも、それから枝分かれした木津川の谷底平地とその緑辺の丘陵ということになります。広く近畿中部の特徴を申しますと、ひとつは京都盆地や大阪平野の北方に続きま

丹波山地、他方は南の紀伊山地にはさまれて、その間が丘陵や低地の分布する地帯になっています。つまり瀬戸内から伊勢湾にかけて大きな低地帯が続いています。その中に、低地帯を区切るような形で六甲、生駒、比良、鈴鹿といった南北性の山地がありまして、それらの間が盆地となっています。そのような盆地の形成史とそこにある地層とは深い関連がありまして、田辺周辺は京都盆地の構造発達史を知るための大切なフィールドであると考えます。盆地を囲む山地を造っているのは約七千万年から二億年前といった非常に古い岩石なのです。しかし、その中の丘陵を造っている地層は新第三紀の終わり約四、五百万年前から新しくは洪積層といわれる二、三千万年前の地層です。そういった地層には分布している場所によって名前がつけられています。びわ湖周辺では古琵琶湖層群、大阪平野、京都盆地、奈良盆地などの周縁に連続している地層を大阪層群と呼んでいます。田辺の丘陵は大阪層群からできています。

次に、そういう地層から今までにわかっていることをざっと申し上げます。古琵琶湖層群は非海成といまして、湖とか平野、河川

にたい積した地層でできています。その年代は湖東丘陵の南部が一番古くて、約五百万年前で、湖西の丘陵がもっとも新しく二、三十万年前です。大阪層群はもっとも古い年代が二百五十万年前とされており、一番新しいもので二、三十万年前です。そのうちの約百万年よりも古い地層は古琵琶湖層群と同じく非海成です。そして、百万年ぐらいいから後の地層は海の地層と湖や川の地層が交互に繰り返しています。しかし、同じ場所を下から上まで全ての時代の地層が見られるのではなく、年代によって分布する場所が違います。それをくわしく調べることによって、湖や海がどのように移り変わってきたかということがわかります。大阪層群では非海成の、つまりより古い地層の分布しますのが京都府南部の田辺・宇治丘陵や奈良盆地周辺、それに大阪では主に泉北以南です。そして、海成と非海成とが互層するより新しい時代の地層は主に淀川をとりまく沖積平野の地下と丘陵に分布しています。つまり、より古い非海成層よりも北に分布しています。

大阪層群で湖や川の時代からどのようにして海が入ってきたかということが今大きな問

題になっています。田辺丘陵には厚い礫層が分布していますが、これは大阪層群に海が入ってくる直前の地層で、宇治丘陵にも同じような礫層があり、さらに東から北へとぎれながらも湖南の瀬田丘陵の礫層へ続くようです。この礫層はまさに古琵琶湖層群と大阪層群をつなぐものです。この礫層の堆積構造を調べまして、湖南地域から京都盆地南部への流れが復元されています。奈良盆地と京都盆地南部（田辺付近）との大阪層群の関係をみますと、奈良盆地の方がより古いようです。

また、先にいいたように京都盆地南部と京都盆地北部とでは後者がより新しいわけで、南から北へ向って地層のたまる場所というか、水系が移ってきたと考えられます。その中で田辺地域は奈良盆地と京都盆地の接点にあるわけで、移り変わりの様子が明らかにされますと、地殻変動ばかりでなく、大阪層群に最初の海が入ってきた様子なども明らかにされると思われます。それはさらに氷河性海水準変動がどのようにして始まったかという世界的な問題にまで発展していく可能性があります。

鈴木 なるほど。そうすると地質、地層、

地形を含めて、南山城というのは地史の上でも非常におもしろい地域だということなんです。

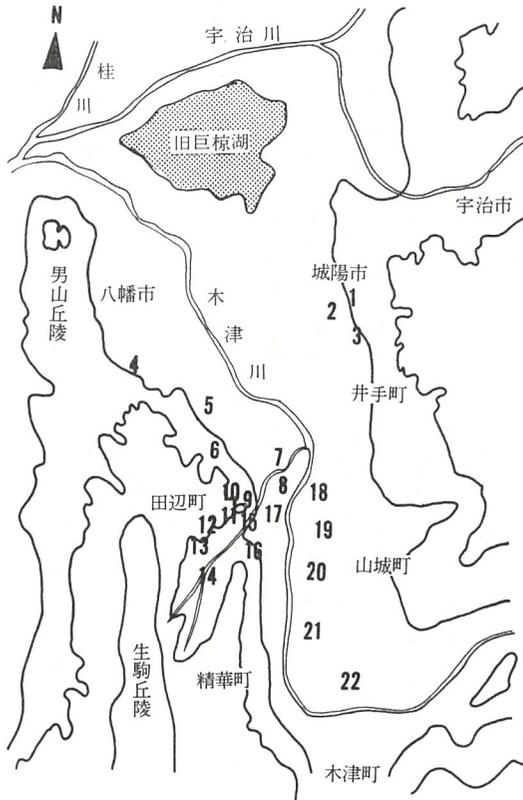
ところで、同志社校地のなかに、火山灰の堆積がありましたね。横山先生はあれを二百万年ぐらいい前と言われたように思うんですけども、そこらあたり、お話しいただけますか。

横山 火山灰は三枚ほどあるんです。同志社校地入口に約二十センチぐらいのものが見えています。あれを「同志社火山灰」という名前にしようと思つて……(笑)。

火山灰というのは、火山の爆発で飛んできたものが湖に落ちてたまるわけです。いろんな鉱物が爆発時にできますので、鉱物の形成時代を測定することができます。年代測定はいまやつてもらっているのです、そのうち結果が出るんじゃないかと思つています。普通の地層ですといわゆる碎屑物、つまり前の岩石が壊れてできた粒子でできていますのでその年代がわかります。

それから南山城で、一番よくいわれるのが、昔、大きな湖があつて、だんだん小さくなって、そしてその残りが目棕池だというお話ですが、非常に一般の人にはうけがよくて

田辺を中心とした南山城



- 1 芝ヶ原遺跡
- 2 久世廃寺
- 3 森山遺跡
- 4 金右衛門垣内遺跡
- 5 大住車塚
- 6 一休寺
- 7 草内
- 8 飯岡古墳群
- 9 天神山遺跡
- 10 同志社火山灰堆積地点
- 11 都谷中・近世館址
- 12 下司古墳群
- 13 普賢寺大御堂
- 14 普賢寺谷
- 15 南山義塾
- 16 三山木廃寺
- 17 旧山本駅
- 18 玉水
- 19 蟹満寺
- 20 湧出宮
- 21 椿井大塚山
- 22 高麗寺

信じられているんだけど、たぶん、うそだと
 思います。理由は幾つかありますけれども、
 巨椋池の下を掘りますと大体三十メートルぐ
 らいで現在の比較的新しい地層がなくなりま
 す。つまり、数万とか数十万とかいう年代の
 がなくなりまして、その下一気に約百万を超
 えるような地層が出てきます。少なくとも百
 万年以前から二十万年か十五万年までは、京
 都の南山城には大きな湖がなかったというこ
 とが最近わかってきた。そういう意味で巨椋
 池は非常に新しい構造運動でできた湖です。
 昔からいわれていたことをそろそろ訂正する
 時期だと思っています。田辺校地で見られる
 地層は、巨椋池の新しい地層の下へ出てくる
 古い地層と同じです。

鈴木 巨椋池、旧巨椋湖は若い湖なんです
 ね。若いといってもわれわれ人類のことを考
 えるのだいぶ年代があるわけですから、も
 っとも、最近はいろんなところで二百万年
 以前の人類のこともいわれているわけですか
 ら……。

ところで南山城で、そういうような自然環
 境のなかで人類がどういような形で住みつ
 いて、どのような発展をしてきたかというよ

うなことを、遺跡の上から、森先生にお話いただきたいと思うんです。石器時代を含めまして、とくに弥生時代、それから古墳時代、飛鳥や奈良を含めて代表的遺跡を紹介していただいて、その遺跡の問題点も合せてお話しただけませんか。

周辺の遺跡と天神山遺跡

森 南山城は一言でいうと、考古学的な遺跡が比較的少ない。縄文時代以前と思われる先縄文、あるいは先石器時代とかいろいろの言い方がありますが、そういう時代の遺物もあまり発見されていない。その次の縄文時代の遺物も非常に少ない。大きな集落のあとといえるようなものは、城陽市に一個所あるぐらいです。だから人類にとつては、それほど住みやすいところではなかったわけですね(笑)。そしてこの地域にお米を栽培するようになってから、つまり弥生時代になったあとでも、やはり近畿地方全体で見るとそれほど遺跡の多いところではないし、それほど大きな遺跡もないのです。

そういうなかで、ちょうど同志社校地の対岸、木津川側になりますが、涌出宮という、

古い神事を伝えたお宮さんがありまして、その周辺に弥生時代のひとつの集落のあとがある。これはわれわれの専門的な言葉でいいますと低地性集落、つまり低いところに、たぶん農耕地とあまり変わらないような高さのところに村を構えていたようです。ところが弥生時代の後期になって、突然出てくるのが、同志社校地のなかにある田辺天神山遺跡ということになるのです。

田辺天神山遺跡は、もちろん弥生時代の集落のあとですが、一つの特徴があります。それは丘陵の上にあるということなのです。弥生時代にかぎらず、平安時代であろうと、室町時代であろうと、江戸時代であろうと、日本の農村は大体低いところに営むわけですね。水田からそれほど遠くない、そして高さもそれほど変わらないところへ住むのです。どういうわけか、田辺天神山は丘陵の上にあるのです。丘陵の上にありますと、まず常識的に農耕地へ遠くなる。つまり生産の場所へは不便になるわけですね。そしてもう一つは、水の入手がたいへん不便なのです。まだ弥生時代では、ほとんど井戸というものを掘る技術はありません。低いところではわず

かに井戸ができつつある時代でありますから、丘陵の上では井戸は掘れない。水の入手も困難である。ですから、日常生活的な便利さをなげうって、ああいう高いところに住むわけでして、こういうものを現在、考古学では高地性集落といっています。これは太平洋戦争が終わったあとで非常に盛んになってきた研究テーマなのです。

そして、大体高地性集落というのが大分県あたりから瀬戸内海の両沿岸、大阪湾、和歌山の海岸地帯、そして東のはしが田辺校地とまるわけですね。ですから西暦紀元二世紀から三世紀にかけて、一時的に集落を高いところにも営む。低いところにももちろんあるのですが、それは別に、高いところにも予備の集落といましようか、あるいは逃げ城といましようか、そういうものを備えた時代が西暦二、三世紀であって、しかも西日本の中心部にあるわけですが、その分布圏の東のはしが田辺天神山で、これはたいへん意味のある集落遺跡なのです。そういうものが偶然、田辺校地のなかにある。

それで、田辺天神山遺跡を同志社が敷地に買収する前に、道路で切られたりして荒れて

おったわけでありませんが、それではいけないというので、亡くなられた秦理事長のご奔走で、ほとんどそっくりそのまま、一種の遺跡公園として——まだそれほど公園らしくはしておりませんが、その原形はできておると思うのですが——保存してある。竪穴住居址が十数軒ありまして、現在、いつ見に行っても竪穴住居が十軒以上見られるというのは近畿地方では田辺天神山だけなのですね。ほかは有名な遺跡でも、行ってみたらつぶれて団地になっているとかがほとんどですから、やはり生きた教材になる。

そして、単にそれは昔の生活とか集落というところがわかるだけではなくて、日本での、国の形成の前段階として、非常に大きな緊張状態が続いた。ある意味では、後の戦国時代に匹敵するような時代が西暦二、三世紀にあったわけだと思ふのです。中国の歴史書ではそれを「倭国の大乱」というような書き方をしていますけれども、そういうものに何らかの関係があるのだらうと思われる重要な遺跡です。

ところで、一つ重要なことは、この弥生時代にすでに巨椋湖があったかどうかという

ことなのですね。これはどうでしょうか。

横山 確實にあったと思います。

森 明治二十三年に測量した地図では巨椋池と書かずに巨椋湖と書いている。そして昭和のころよりも面積が広いのですが、その巨椋湖というものを真ん中に置いて考えますと、山城国が南と北にすっぽり分かれるわけですね。真ん中に湖をもっておる。そうして北の文化圏と、南の文化圏に分かれる。これはたいへんおもしろい。いまのような見方をすると、田辺校地は弥生時代、古墳時代、そういう時代には、湖の南岸から少し離れたところという環境になるのではないか。

それからついでに申しますと、古墳時代になりますと南山城には、数は多くありませんが、重要な古墳が幾つか築かれる。その一つが、これも木津川の東側になりますが、樺井大塚山古墳で、これは日本で一番たくさん銅の鏡を出した前方後円墳として名高いのです。

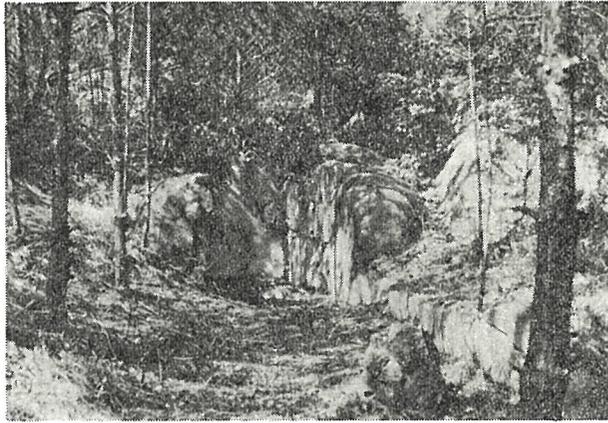
この銅の鏡についても、ある学者は中国の魏の鏡ではないかという人もおりますが、私は魏の鏡説はとりません。しかし、いずれにしても、日本の古墳時代全体のなかでも問題

になる遺跡が出てきます。それから田辺校地のごく近くに銅鏡を数枚出した興戸古墳があります。ですから古墳時代の前期、四世紀ごろになると、かなりの政治的な勢力が育っていたわけですね。ただし現在のところ、まだそれに見合うような村の跡は見つかっていない。

それから、古墳時代の後期、六世紀ごろは全国的に非常に古墳がふえる時期なのですけれども、どうも南山城は、そのころはあまり古墳の数は多くないのです。これは隼人の問題とか、高句麗系集団の問題とも関係していますが、古墳は多くない。近畿地方でもおそらく、古墳のふえなかった土地として特徴づけられるのではないかとおもいます。

しかし、そのなかでも、奈良県の壁面をもった高松塚古墳と非常に近い年代の古墳が同志社の敷地のなかにあります。下司の古墳群ですね。この下司古墳群というのは私も十年前ほど前は単なる横穴式石室の古墳と考え、それほど重要性を見出せなかったのです。しかし、高松塚に壁面が出てから、その時代のもの——その時代といえますのは日本の古墳が急激に減る時期で、天皇、皇族およびよほど

田辺校地内下司2号墳（七世紀の石室）



位の高い貴族しか古墳を残せない時代で古墳時代終末期とよびます——の研究が進み、南山城での唯一に近い終末期古墳が実は同志社の敷地のなかにあることがわかってきた。そして下司の古墳群のすぐ近くに、七世紀代に

はもうできておったのでしようが、普賢寺というお寺がある。だから、おそらく普賢寺をつくった人と、下司古墳群に埋められている人とは非常に近い。たとえばある人とその祖父ぐらいの関係じゃないか。そのぐらい年代が近づいていると思います。

白鳳——天平の仏像

鈴木 いまお話いただいた普賢寺ですけれど、あの周辺を歩くと、白鳳から天平ぐらいの瓦が落ちていきますね。

笠井 私はその瓦、まだ見てないんですけども、一応白鳳時代の瓦だということになっていようで、それでこれは筒城大寺というふうにいわれているんですが、普賢寺がはっきり文書の上に出てくるのは、興福寺関係の文書で、天平十六年（七四四）に良弁が再興したとありますから、筒城大寺はその前身でしょう。その後、普賢寺は、奈良時代の末になって、宝龜九年（七七八）に五重塔ができています。現在、普賢寺は観音寺とも呼ばれますように、十一面観音像がごいます。その十一面観音像は、有名な奈良の聖林寺の十一面観音像をちょっとやせ型にしたような

もので、造法も一木造の乾漆ですから聖林寺と同じなんです、大体そうすると、この仏像のつくられたのはやはり宝龜年間というふうにも考えられています。

鈴木 同志校地の近くにあるいまの観音寺は、普賢寺の大御堂ですね。

白鳳から天平の話が出たわけですが、あの周辺で白鳳の仏として知られているのは木津川をはさんだ東側の蟹満寺、あそここの釈迦如来ですか、あれはどういう仏なんですか。

笠井 これは一番むずかしいものではないですね。蟹満寺というのは『今昔物語』の話が有名で、長者が、へびにのまれようとするカニを助けたところが、今度は長者の美しい娘がへびに見込まれて、へびのお嫁さんにならなきゃならない。そのへびが若者に化身して娘をもらいにくるわけですけども、その晩にたくさんカニが出てきてへびをかみ殺した、というふうな伝説をもっている、たいへんロマン的な寺なんです。

この蟹満寺は、平安時代の末には広隆寺の末寺になっておりまして、広隆寺側の記録には、その長者は秦河勝の弟だとしています。だから秦氏系の寺だということになります。

がね。それがどれだけ信ぜられるかどうか、わからない。ところがその伝説では、そうやって娘が助かったというのは観音信仰ですから、いまの釈迦像とは直接結びつかないの
で、むしろあの釈迦像は、ほかの寺から移してきたんじゃないかということなんです。

で、あの仏像は、山田寺の仏頭と、薬師寺の金堂の薬師三尊像を結ぶ線上にあるものでしてね。ちょっと後補の部分があるので時代判定がむずかしいんですけども、初唐の様式というよりはむしろ、隋の様式を残したも
のではないかというふうに私などは見ている



国宝・観音寺十一面観音像（八世紀）

んですが、学者の間でも説が一定しません。しかし、南山城にあれだけの大きな金銅像があるということは、これはもうたいへんなこと
なんですね。

森 先ほど古墳の話をしましたが、大体四世紀の古墳が五つある地域ならば、六世紀の古墳が百も二百も出てくるのが全国的な傾向
なのですが、南山城は非常に六世紀の古墳が少ないのです。だから大きな政治勢力が存し
ないのかなとも思うのですけれども、ところが今度は七世紀代、とくに七世紀の後半ぐら
いのころの寺院跡が非常に多いのですね。直

前の時期の古墳は少ないのに、その直後の古代寺院が猛烈に出てくる。だから古代史の研究のなかで謎の多いところなのです。これで

もし寺院跡がなければ、古代史の人は、南山城にはとりたてて大きな古代豪族はおらなかつたという結論を出すでしょうけれど、寺院跡は多いですから。そうすると急に勢力のある豪族が出てきたとか、あるいは、その集団は非常に進歩的であつて、いち早く古墳をあまりつくらなくなったとか、いろんな解釈が生まれそうですねですよ。

笠井 大体、南山城は渡来系氏族の多いところなんです、これは森さんにお聞きしたいんですけども、「田辺」という地名ですが、これはやっぱり田辺史に関係あるんですか。もし田辺史に関係あるとすると、そのへんがちょっといろいろおもしろいことになりはしないかという気はするんですが、まあ田辺史はふつう河内ですからね。

渡来系氏族と隼人

森 田辺氏とのつながりを説明する文献資料はないようですね。常識的にいわれていることは、南山城の場合は高麗^{こま}氏、高句麗系の集団のたいへんな中心で、高麗寺跡もあるし高句麗の客院もおかれていた。これは田辺校地より更に南へ行つたところで、樺井大塚山

古墳の所在地でも、合併以前は高麗村でした。それから城陽市に久世というところがあります。それが、高松塚の壁画を描いたグループに関与しているだろうといわれる黄書連きょうしょれんという豪族の根拠地が久世なのです。久世付近には久世寺跡とか平川廃寺とか、いくつもの寺院跡があります。終末期の古墳も一つあって、おもしろい地域なのです。

ですから田辺校地のごく近くに限ったら、渡来系集団という視点では直接には説明できない。ただ、田辺校地より少し離れたところに息長山せきながやまというのがあります。息長氏、これは琵琶湖の長浜あたりの和邇系わにの豪族ですが、それに関係のありそうな地名があります。

仲村 普賢寺の山号が息長山ですね。

森 息長氏をもし和邇系と見た場合、古い渡来集団と見るのか、あるいはそうでないと見るのか、古代史では分かれているようですけれども、それと同志社校地のところの多々羅という地名の関係がありますね。この多々羅というのは普通は製鉄関係の地名なのですが、現在のところ、まだ製鉄関係の遺物は見つかっておらないのです。製鉄の遺物が見つかればよいのですが、多々羅氏はやはり渡

来系集団ですね。

笠井 多々羅ということになれば、当然息長と関係するわけですね。

鈴木 いま森先生が言われた多々羅ですね。同志社校地の主要な部分が多々羅に入りますけど、かなり歩かしていただいても製鉄遺跡に関する遺物はまずない。ただ生産遺跡という点で広げて考えると、須恵器の窯ですね。破壊されて、すでに整地されてしまっているわけですけども、そういうものがある。

で、あの時期のことを考えると、先ほどのお話のなかの渡来系氏族とは別に、もう一つ単人を考えなきゃならんのかなと思う



田辺大住の単人舞（田辺町無形文化財第一号）

——田辺町教育委員会提供——

んですが、このあたりはどうでしょう。

森 単人は南九州、とくに宮崎県と鹿児島県を中心にした大きな集団なのですが、この単人の一部が、六、七世紀には盛んに近畿地方に移住している。あるいは一時住んで、また向こうへ帰ることもあるでしょうけども、こちらへ住みついたものもある。その一つが奈良県の南部、五条の近くで、それに匹敵するのが田辺校地から男山八幡にかけての、男山丘陵の東斜面ぞいにずっと住んでいたらしいのです。

どうしてそういうことがいえるかといいますと、これは文献にも出てくるのですが、南九州では普通の古墳ではなくて、地下に穴を掘って墓にする。つまり横穴や地下式横穴ですね。しかもそれは上から掘っていくので、地下式横穴といわれる。盛土をしないでかたい土地のところを掘っていくという、そういう特徴的なお墓を単人は残しているのです。ところがおもしろいのは男山丘陵の東側にはずうっと横穴または地下式横穴の可能性のあるものが残っているのです。男山八幡のあたりから、田辺校地のすぐ近所の飯岡まで残っているのです。男山丘陵は本来はあまり横

穴を掘るのに適さない壊れやすい土質なので
すね。それにもかかわらず、やはり掘り込んで
いるのですね。だから南山城の隼人の場合
は、すでに九州でできあがったひとつの風習
を持ち込んできたと思えない。考古学的
に見ますと、隼人がこの地方にやってきたの
は六世紀の後半か七世紀ぐらいと私は推定し
ているわけです。

鈴木 七世紀の後半という、寺ができ始
める頃ですね。同志社の校地の周辺を見ると
普賢寺の跡のほかに南側の三山木廃寺がござ
いますね。それから北側には興戸廃寺、それ
ぞれ天平の瓦が出ています。三山木につい
ては平安時代の瓦も出ているわけです。

あの時期を含めて、山城、大和、河内、そ
ういうようなところでかなりの人やものが動
いているわけでしょうけれど、八世紀に入る
とすぐに、『続日本紀』でしたか、都亭駅の設
置の記事がありますね。古代の交通で登場す
る山本駅、あれは同志社校地から飯岡へ行く
途中の山本の集落あたりでしょうか。

仲村 そうですね。まあ、これはあとで中
世の交通路と関係させて……

鈴木 なるほど。交通の問題も非常におも

しろいかと思えますが、それは後ほどお話し
ていただくようにしたいと思います。

ところで笠井先生、例の当尾から笠置を含
めて南山城を考えると、あそこにも有名な寺
が幾つかありますね。浄瑠璃寺とか岩船寺で
すか。

笠井 浄瑠璃寺、岩船寺は少しあとの時代
になりますね。けれども全般的に言います
と、南山城というのはいま歩いてても大和棟の
民家があるというふう、京都市というよりは
非常に奈良的な面影があるところで、ちょ
うど田辺をはさんで、薪の一休寺でようやく
京都の文化圏がそこへ鼻先を飛び出させ
た。あとは大和的な文化圏だというふうな感
じを私はもちます。

先ほどおっしゃったように、非常に寺跡も
多いし、瓦も白鳳、天平的なものが出る。先
ほど話に出ました白鳳、天平の仏像も見逃せ
ないりっぱな作品が残っているんですが、残
念ながら七、八世紀の状況を知る手がかりが
文獻的に非常に乏しくて、よくわかりませ
ん。

それで普賢寺は八世紀のごく終わり、延暦
になりましてから炎上しますが、鎌倉時代に

撰関家の厚い層依をうけて再興されます。こ
れを再興した藤原基通は普賢寺殿といわれ
るくらいですから、寺も盛り返します。

銅生産と製鉄

仲村 森先生、さっきの多々羅の話に関係
しますけれども、『三代実録』に、九世紀の中
ごろに相楽郡岡田郷に銅が発掘されて、そし
てそのために役人を置いていた記録があるん
ですけれども、南山城の銅生産は、どうでし
ょうか。

森 和同開珎なんかの銅銭を鑄造した鑄銭
司跡が加茂町にある。

仲村 地名としても残っていますね。

森 加茂町に、岡田郷が推定されているよ
うです。

それから製鉄と銅生産では、かなり技術が
違うんですね。鉄鉱石の場合ならばどこかで
似てきますが、砂鉄の場合はまるで違う技術
になってくる。

それでどうなんでしょうね、田辺校地の周
辺は製鉄の原料が出る可能性はあるのでしょ
うか。

横山 製鉄の原料というのは何ですか。

森 砂鉄が入っているかということなんです。

横山 水酸化鉄でもいいんですか。

森 あんまり微妙なものでは古代は利用しきれませんからね。やっぱり川のなかでふるうと、ザツとザルの中に残るようなものではないと……。

鈴木 普賢寺川の川底にそういうものはありませんか。

小野 運び込んだと考えられませんか。あそこは水取から越えて行けば大阪に近い……山が低いですから。

森 たとえば大隅半島と薩摩半島の場合は薩摩半島側の砂鉄の原料を大隅半島へ運んで製鉄をやっている。これは明治十年ごろの例ですが、あまりやらないようですね。

中川 山の地質からいっても、そう多量に出るというようなことは考えられません。

森 出ないですか。

小野 防賀川の性質と、普賢寺川の性質が違うように思うんです。普賢寺川のほうが大きいですね。防賀川というのはきわめて短い、酒屋神社のわきからしか、いまは防賀川と言わないほどの、しかし水源はもっと奥ま

で入っているんですね。それを入れて行きますと、二キロぐらいい入るともう河内につながる。だから同志社校地のあたりは、東西交通のルートにある。

仲村 普賢寺の谷は非常におもしろい谷ですね。交通の関係からいえば、河内の枚方、四条畷とすぐつながるといふことと、また、中世の話になります。ひとつの谷がどうも要塞化するようですね。とくに戦国時代は。谷の口と奥を閉めると非常に防衛しやすい。

事実、戦国末期には、この普賢寺の谷を中心にして戦鬪が何回も繰り返されております。それは、やはり河内と南山城をつなぐ拠点にあることと関係があると思います。

森 いまの問題ですが、河内の場合は生駒山地の一番南、信貴山のあたりですね。大阪に雁多尾畑^{かんどおぼ}という村がありますね。雁多尾畑あたりは鉄生産ができたのではないかという仮説が出ておるのです。よく自身は、歩いた経験ではまだちょっと認められないんですけど。

そうすると、生駒山地の一番南側に、古代の製鉄遺跡がもし将来確認されてくると、小野先生がおっしゃったように、水系の問題なんかも考えると、同志社近辺の多々羅

という地名は、将来のひとつの研究テーマになりますね。そういう名の集団がいただけなのか、それともそこで製鉄までやっておったのかということ、重要なことになりま

す。

横山 そのなかで砂鉄を濃縮するところがありえれば……。どのくらいの規模で製鉄がやれるかがよくわかりませぬけど。

森 古代の場合は、資本主義的にもうかるかどうかということ抜きにしますからね。ちよつとの原料でもやっています。

横山 須恵器の粘土でもちよつとしたものがあればいいんですからね。大量にあるからそこで産業が栄えるんじゃないかと、自分が要るから……

小野 間に合う程度でいいわけですね。

横山 ええ。一つの窯をつくるだけの粘土があれば、ちゃんとそれで窯は成り立ってしまふ。

古代・中世の問題点

森 それでは古代の残ったことを、ざっとこのあたりで言っておこうと思うのです。一つはね、先ほど南山城が、たとえば民家なん

かで大和棟があるという話なんです、弥生式土器の時代は不思議に、南山城の土器と奈良県の土器がそれほど似てないのです。むしろ南山城の弥生式土器は滋賀県とか、それから三重県から東海のほうにつながる傾向がある。そういうおもしろさがある。

それからもう一つは、先ほどの隼人のことなのですが、正倉院文書のなかに隼人の計帳というのが残っている。ただこの計帳は頭の部分が切れているので、どこの国のものかが長いことわからなかった。しかし、同志社の大学院にずっと講義に来ておられました西田直二郎先生の研究で、どうもこれが同志社校地のごく近所の南山城の隼人のものにちがいないということで、現在ではこの隼人の計帳は南山城の隼人の税金台帳であることが確実になってきた。

ですから南山城の場合、隼人研究というのは文献と遺跡との両方からわかる地域なのです。それからひとつ興味をもっているのは、隼人はたいへん竹細工が得意である。ですから『延喜式』を見ても、隼人が朝廷に貢納するものは各種の竹細工ですね。そうやってくると、南山城一帯の竹林はいつごろから

あるのか。人類以後、もうずうっとあるのか、それとも隼人の移住に伴って動いてくるのか。前から一つ興味をもっているのです。これは将来の研究課題になることだと思います。

仲村 日本のお芸史のひとつの流れとして隼人を位置づけるという問題がありますね。

たとえば、ここが隼人司の領地であったということが、十五世紀の中ごろの中原康富という公家の日記に出てくるんです。ここ——大住ですね——とそこのほか五カ所、計六カ所を支配してきたが、守護や被官人の侵略によって有名無実になってきたので、訴えが出されたわけですね。その場合に、隼人が行うべき職掌に風俗歌舞というのが出てきますね。

それから同じ日記に、隼人が名主である一町二反の名田を隼人が死んで、あとを継ぐ者がなく売られてしまった。そのため舞楽をつとめる者がいないと書かれておりまして、朝廷での舞楽は大住の住人たちが担っておったということがわかります。

だいぶ時代が飛びまして、杉井先生の範圍になってきますが、明治十三年に愛民義塾が南山義塾以前に大住にできます。その設立者

の榊井保親という、これは府会議員で、この地域の民権運動の中心になった人ですけれど、その人の伝記を見ますと、伎楽を家伝として、代々隼人司の役人の長であったというようになことが記されています。ですから古代から明治まで連綿と隼人の舞楽というものが伝承されていることがわかり、芸史の面から南山城を考える場合、興味深いと思います。ぼちぼち古代が終わりますが、古代の問題で大事なことに、木津川の問題があります。

鈴木 泉川ですね。

仲村 木津川が奈良の都の造宮や平安京の造宮の材木を運ぶ搬送路であるということは非常に大事です。役所の建物だけじゃなしに、薬師寺、大安寺、東大寺、興福寺などの巨大寺院ができますね。その材木は、ほとんど伊賀の杣山から伐り出して木津へつけるわけです。

そういう意味で木津川の機能は都の巨大建築とは切っても切れない関係にあるということです。ここに木屋、木守という特殊な役人が置かれますが、それがやがて中世には問丸というような、材木以外のものを扱う商業上の拠点になるという意味で、木津川、つまり

泉川のもっている役目は非常に大きいと思えますね。

小野 その木津川は、いまは飯岡の東を流れているけど、昔は飯岡の西を流れていた。だから田辺の地名に河原とか、沓脱とかいうのが、川からかなり離れ残っています。トノ荘という名もあるように、橋がかけてにくい川だったんでしょうか。とにかく、渡しですね。合戦があつて逃げて行くときにも、その渡しを通過して……

仲村 橋はつくるんでしようけれども、流されてしまうんですね。

横山 水量の変化が非常に大きい川ですね。つまり水の少ないときと多いときの格差が大きい川なんじゃないでしょうか。

小野 結果として、川砂は非常に洗われてきれいなんです。だから木津川の川砂は、大阪のビルに全部入ったわけです(笑)。その分だけ川底が下がった。昔は興戸のあたりから木津川を遡りして行く帆かけ船が見えたといふんです。川底が高かったから、堤防も低かったせいもあつて帆かけ船は見えなかった。それを運んでいたか、よく知りません。いま九十歳ぐらいの人だと、その帆かけ船の思い出

があるらしい。砂はとにかく大阪へ行ってしまった。木津川の砂がなくなつたんで次は城陽の山砂利がねらわれて、城陽の山砂利がなくなつたので、今度は同志社校地と隣接の防賀川の奥の山砂利もねらわれているらしい。同じ質でしょう。

仲村 小野先生の渡しの話ですけれども、文明時代の記録によりますと、木津の渡しは四間半の船です。戦国時代の終わりですけれども、木津川の渡しは洪水で沈んで、一艘で三十四、五人全員死んでいます。それに乗っているのは伊勢衆、狛田あたりの近辺衆と、猿楽の芸人です。中世の木津では、船が渡しとして使われていたことがわかりますね。

横山 橋はできないんじゃないですか、近世に入るまでは。

森 木津川の場合は、木津から奈良のほうにかかっている行基がつくつたといういすのせき泉大橋いすのせき、これは有名ですね。そしてその橋のたもとに泉橋寺がありますね。これは奈良時代にはもうあつたでしょうね。

それからずうっと下流へ下つてくると……
小野 玉水大橋、これはちよつと古いんじゃないでしょうか。

森 どうでしょうねえ。ぼくの知っているのは泉大橋と川筋は違ふけれども宇治橋、これは七世紀末にはあつたらしいですけれども、全体として非常に少ないと思います。やはり舟を使つていたのでしょう。

横山 岩盤が迫つて、急流で、渡しができなくて、岩の強いところしかかけないんですね。

森 そうかもわかりませんね。
笠井 現代と違ひましてね、昔はたくさん物質を運ぶときは、むしろ船のほうが便利なんです。

小野 橋の上は荷を積んだ馬を通さないといふ。三条の大橋でも荷を積んだものは川のなかを渡れとか。そうすると橋は荷のためには要らない。

鈴木 そういうことなんでしょうね。

確かに南山城の場合は、木津川が大きな意味をもっていると思うんですけども、先ほど仲村先生が言われました文明年間の船で、ひとつ中世のほうに移りたいと思います。文明ということになる、これはやはり山城国いづみ一揆が登場するんじゃないかと思うんですが、そこらあたり、ひとつ仲村先生お話し

だけですか。

山城国一揆と関所

仲村 有名なのは、文明十七年から十八年の『大乘院寺社雜事記』に出てくる、山城国中の土民等が群集したという一揆ですね。山城国人が集会した。これは畠山政長、義就の両軍の撤退を要求して、それから寺社領はもとのごとく武士から寺社に戻すように要求したという有名な一揆です。「山城国一揆」といわれておりますけれども、山城国全体の連中が集まったのではなしに、この場合の国一揆というのは宇治郡、久世郡、綴喜郡、相楽郡、この四カ郡の連中が集まってきて撤退を要求した。この一揆は高等学校の教科書にも出てくるわけですが、要求の一つに、関所の廃止があるんです。

木津川をはさんで東側と西側に街道があります。東の街道は泉大橋と宇治橋を通じて京都に入る。このほうが古いと思うんですが、片方、西の道は淀へ出て、淀や山崎から渡って京へ上る。二つの街道に多くの関所ができてるわけですね。

関所をつくった武士にとってどういう効果

があるかという点、十五世紀の終わりの話なんです。宇治橋を渡るときに五文、宇治関で六文、狛関で六文、木津の渡しで五文——このときは木津橋はないわけですね——それから多賀関で三文、計二十五文になります。二十五文というと、十五世紀の物価で換算しますと、大体米にしたら二升五合です。宇治から奈良へ入るのに、木津を渡るまでに二升五合相当の金を払ったという勘定になるわけですね。

そうしますと、算術的ですが、十人寄ったら二斗五升、百人で二石五斗、四百人で十石になるわけですね。しかも、馬や牛の荷には相應の通過料を取るわけですから、一日四百人として十石、十日で百石、百日で千石ですね。だからこれは膨大な武家の収入になるわけですね。こういうものが、こころあたりに住んでおる農民たちにとっていかに障害になったかということは、これでわかります。だからそういう関を廃止しろという要求は当然です。

ところで畠山政長と義就に撤退を要求した国人は、一体どういう連中でしょうか。大字程度の村落における百姓の指導者といえます

か、中世史の用語では村落領主とか地侍といわれる連中が、農民の要求を受けて、反対集会に出て行くのです。そういう連中の大きなのは館をつくります。館の大きなのは城になりました。大体十五世紀段階で南山城に三十分ほどの大小の城がありますが、興福寺の領地であった草内——これ、クサチと読むんですか。

小野 クサジと言う人もいます。

仲村 昔の記録では草路と書いておりますから、昔はおそらくクサチとか、クサジとか呼んでおったんじゃないかと思うんですが、そこに草内殿という地侍がおりまして、興福寺に納めるべき年貢を自分が集めて払わな。興福寺の下っ端の役人が取りに行くと、濠の橋を上げてしまっ出てこないというんですね。つまり草内殿は環濠——濠で囲まれた館に住んでいるのです。そういう連中は草内殿、田辺殿、草内西殿とか「殿」がつけられています。そういう連中がおそらく農民の要求を代表して、集会に参加しているのです。

それから、このころの木津から宇治までの中心は、少なくとも木津川の西岸では、田辺だと思えます。それはどうしてわかるかとい

いますと、田辺に市が立っておって、市で物を売ったり買ったりする升が決められておるわけですね。田辺の升というのがあって、これは奈良の十合升に比較すると四勺だけ多いというような記録がある。中世の升というのは雑多でありまして、地域とか支配者の側で違ふ。ですからうまく換算しないと商売ができません。その場合、田辺の市の升が出てくることは、少なくともこの当時、西岸では田辺が人の集まる場所であったのではないかと考えられるわけです。

鈴木 田辺の升は大きい。田辺で物を買えるということですか。

森 年貢の場合には、よけい取られる(笑)。

仲村 売買升と、収納升とがあり、収納するときは大きな升で取るわけです。それはそのころの領主の常套(じょうそう)です。

戦国時代の田辺

鈴木 ところで、いまお話をいただいている文明年間のことでですけども、たまたま田辺の普賢寺の大御堂に所蔵されているという古絵図がありますね。正長元年のと文明二十年だっただかと思うんですが、これについては資料

批判をする必要があるかと思いますが、たまたま田辺の同志社校地の南側の部分がすっぽり古絵図のなかに入っているかと思えます。

このなかに、普賢寺殿、下司殿、堀殿なんというのが並んでいるわけですけれども、これが同志社の校地のなかのどの地点に相当するかというのは全くわからないわけですが、たまたま私も発掘調査をさせていただいた地点で申しますと、十五世紀の後半から十六世紀、一部確かに十七世紀初頭まで下がる遺物があるわけですけれども、これもやはり、将来ひとつ課題にしておかなければいけないんじゃないかと思っています。この古絵図それ自体はどんなものでしょうか。

仲村 この現物を見せていただくのとわからんのですけれども、字からすると明治ですし、それから「皇居」というような言葉が出てきまして、こういう言葉は中世ではあまり使わないですから……。しかし、全くの架空のものだとは思えない。やはり描いてある内容には問題がありますが、土豪屋敷の描き方というのは、あながち架空のことを描いていない。ですからこれのもの図というのがあ

って、それに筆者のいろんな考えが加わってこういうふうになったんじゃないかと思えますね。明治に写されたものだと思います、字体から言って。紙を見たら、もっとよくわかりますけれど。

横山 建物があったと思われる現地を歩いてみますと、丘の中腹に平地があり、そこに生えている木は、山地に生えている木と違ひますね。人工平地と考えると、ところがたくさんあります。同志社の校地の西側で……。

その五重塔が建っている一番大きな谷には、たくさんありますね。われわれは山を削って地層を見ますが、そこを削ると地層でないわけです。盛土みたいな……。

仲村 多聞院英俊という興福寺の坊主なんです、これがおそらく春日の一ノ宮の鳥居をつくるために、普賢寺に直径が四尺五寸の材木があるといっています。まあ自分の領地ですだからよく知ってるんですね。

それから先ほど普賢寺谷のことについて、大事なところだと申しましたが、天正五年の九月十六日の信長の朱印状の写しが『田辺町史』に載っておるんです。ところがこの読みが悪いんです。幸い写真が掲載されています

ので読ましてもらおうと、その時代のものとはば信用していい。天正五年といえますと、信長の四十四歳のときですね。そのころの信長の施策を検討しますと、普賢寺惣侍中であてた命令書は信じていいと思います。

そうしますと問題は、普賢寺惣侍中ということです。これは普賢寺の侍待ではなしに、普賢寺谷におるところの侍中だと思えます。先ほど、普賢寺谷を中心に戦鬪が繰り広げられたと申しましたが、永禄十年、松永弾正久秀がこの普賢寺谷を焼いておるんですね。それから元龜二年、細川藤孝——これは山城の勝竜寺におった領主なんです、これが普賢寺城を攻めておる。それから元龜二年、同じ年の秋に、同じく松永久秀が宇治の槇島を攻めて、その明くる日に普賢寺城に入城しておるといような記録がありまして、何か南山城を制するときにはここを押さえんといかんというような、そういう重要な拠点になっているように思いますね。ですから、普賢寺城が描かれているこの図面は全く架空のものだとは考えられないということになります。

小野 多々羅、水取、打田を越えるあの道は、昔から頻繁に使った道ということになり

ますね。

仲村 そう思います。

笠井 永禄十年の松永が普賢寺に火をかけたときというのは、ちょうど東大寺の大仏を焼き討ちした、そのあとやるわけですから。

仲村 そうです。そのあとです。

笠井 これはやはり普賢寺そのものが興福寺領であるということで、檀徒との結びつきをもっているのだから、檀徒との結びつき

仲村 そのときの相手は三好三人衆ですね。三好長慶の家臣なんです。

鈴木 中世の封建社会が崩壊するということか、そういう時期でもやはりあの地域、非常におもしろいわけですね。

小野 興戸の丘の上から見ますとね、若草山の山焼きも、それから東山の大文字も妙法も見えます。だから、のろしを上げればあそこは一挙に……そういう場所ではあるんです。

森 さっき仲村さんのほうから、谷がひとつの武士集団の勢力であるという話が出たのですが、先ほどの弥生の高地性集落ですね。あれも具体的に言いますと、田辺の天神山遺跡があって、そして南側に川があって、そし

てもう一つ三山木麿寺のある丘陵がありますね、あの先端でも弥生式土器が少し出るので。そしてさらに飯岡でも出る。そうすると、田辺天神山だけを見ると一つの丘陵にあるようにすけれども、大きく見ると二つの丘陵にあって、その谷口を閉めてしまうと、ずうっと谷全体がひとつの勢力範囲になる。ちやうど、朝倉氏の一乗谷みたいな谷地形を占有する構造ではないか。そうすると、もちろんその間の時代についても証明が必要ですが、弥生時代からの伝統が戦国のころまで残っていた可能性もある。

それからもう一つは、南山城の国一揆のような性格のもの、一言でいえば、上杉とか武田とかの強い領主がおらなかったという政治構造ですね、そういうような政治のあり方といたしましうか、社会のあり方が、やはり古代以来の単人とか高句麗とかいろんな集団が住んでいた地帯、——これは日本民族のある意味では典型的な地帯ですが——そういうような伝統も、どこかで影響してないだろうか。大体南九州なんてのは、古代では、統一国家に組み込まれるのに非常に抵抗するところですね。奈良時代ごろになっても、単人が

律令制度に反抗する。ですから、そういう伝統の有無もこれから検討するとおもしろいのです。古代から近代まで一貫した伝統の研究を同志社校地とその周辺で試みるとおもしろいですね。

(森氏、授業で退席。)

西陣商人のふるさと

鈴木 なるほど。ところで古代、中世について政治的にも、社会的にもいろんな話題を提供していただいたんですが、近世に入っ、ひとつ今度は角度を変えまして、経済的な問題を扱っていただきたいなという気がするんです。どうなんでしょうか、俗に、西陣商人のふるさと南山城⁴なんてところで……

仲村 南山城といわず、近江や丹波から出てきた人が西陣の商人になっているケースが多いわけですね。戦国時代から江戸時代の初めにかけて、有名な茶屋四郎次郎という、これは京都の三長者の一人なんですけれども、従来、生粋の京都の町衆だというふうにいわれておったんですが、最近の研究では違うんです、南山城の出身といわれております。地侍クラスのものが何かの拍子に京都へ出て商売するとき、南山城のもっているいろんな機

能を体现するといったら大きいですけれども、南山城に生活しておったときの時勢に敏感に対応する性格を活用します。たとえば茶屋四郎次郎というのは徳川家康のスパイ係をやっておりますね。権力に取り入って出世していくというひとつのコースですね。

これは西岡出身の松永弾正久秀とか、大崎の油商人であった齋藤道三とかに共通するタイプだと思うんです。南山城はそういう連中が輩出するような条件を備え、またそういう政治的な条件をもっておるところであるというふうに思います。

それから江戸時代に入りますけれども、現在大宮通元誓願寺下があったところに木村卯兵衛(笹屋卯兵衛)という京都では大きな帯地問屋で、江戸時代の中ごろから続いております——現代では八代目ですか——商人がいるんですけれども、初代は興戸の出身で出垣内村の木村兵四郎家へ養子に行つて、そこに子供が生まれたものですから、京都へ奉公に出てそして笹屋の別家になったのです。

おもしろいことには、江戸時代の中ごろからあとですけれども、たえず南山城の出身地とは交流があるのですね。西陣には山城出身

の商人、丹波出身の商人、近江出身の商人がいるのでしようけれども、多かれ少なかれ、木村卯兵衛家のような形をとり、奉公人も、主人の出身地の人が多いんじゃないか。そういう意味で、西陣の何分の一かは南山城出身者が占められておると思います。

鈴木 木村卯兵衛の出身が興戸。そうすると同志社校地にすぐ隣接するところですね。あの界隈の人たちが西陣商人の一角を支えていたという、楽しいお話をありがとうございます。

近世についてはまだいろいろお話をちょうだいしたいように思うんですけども、やはり同志社を中心に考えさせていただきますと、近代の南山城での新島先生をはじめとされた活動というものも重要かと思えますし、そういうところに話を移さしていただきたいと思えます。あの時期に関しましては、やはり南山義塾の問題がございましょうが、農村伝道についてとくに関心がおありの方が多いわけですので、杉井先生から農村伝道を中心にお話ただけませんか。

同志社と田辺

杉井 近・現代の問題は、同志社と田辺とが一体どんな結びつきがあったかということに焦点をしばって考えてみたかどうかと思います。そうしますと二つの特徴が出てくると思います。

一つは、新島襄が同志社大学の設立の趣意を公表して、義捐金を募集したことがあります。そのときに、田辺の人々はどのような動き方をしたかというのを一つ資料で見てください。

それは明治十七年のことでありますが、そのときの、設立の理事になる人に、綴喜郡と相楽郡の代表として伊東熊夫という人が出てまいります。この人は、実はあとで少し言及をいたしますけれども、自分の子供も同志社に入れる男でありまして、衆議院にも立候補をして当選をする有力者であります。彼は新島襄、山本覚馬が京都の町ならびに郡部の代表者を招いて運動の理事になってもらったときの、相楽・綴喜郡の代表者で、この伊東熊夫という方は田辺の出身です。

仲村 普賢寺谷の出身です。

鈴木 同志社校地の南側に、たしかお孫さんがおられるかと思えます。

杉井 ご承知のように新島襄は明治二十一年の十一月から、いわゆる大学設立のための義捐金運動を全国的にやるわけです。そのときに田辺の人々はどのような姿勢を示したかといえますと、いま同志社の社史史料編集所に残されている「義捐者名簿」というのがありまして、それを見ますと、明治二十二年の四月調べですけれども、西川義延五十円、北川伝左衛門十五円、西川長彦十五円、喜多川孝経二十円、田宮勇五十円、先ほどの伊東熊夫が百円、吉川磯右衛門十円。いま申しましたのは全部申込金額ですけれども、その総額は二百六十円あります。この人たちはみんな綴喜郡の大地主、有力者です。

そのころ、同志社のほうではどのぐらいの醸金が実際集まっています、田辺町からの募金高というのは一体どういう割合を占めているかといえますと、二十二年の四月調べで、これも社史の資料に「同志社大学設立に関する経費決算報告書綴」というのがあります。それによりますと、上京の住人の申込金額は二、二六三円五十銭、実際の払い込みは三八五円六十六銭五厘、下京の人は一、四七四円十二銭六厘、実際の払込金額は一五五円六

厘。それから「丹波三郡」というくり方をしている、八八九円三十二銭というのが申込金額で、そのうち実際の払込金額は二〇七円四厘という額です。

さて、問題の綴喜、田辺なんです、山城三郡」というくり方をしております、これは綴喜、相楽、宇治、さらに久世郡のうち、どれをさすか、明確にしえませんが、三六〇円の申し込みなんです。そして実際の払込金額は六十円あります。

そのほかに、京都府下では、京都府庁と警察から一千三十六円二十七銭の義捐金申し込みがあります。そこから実際に払い込まれているのは四百円あります。

これは明治二十一年の十一月から始めて新島襄の死ぬ前まで、同志社大学の設立のための義捐金募集というのを全国的に行っていたわけ、醸金の一番多く集まったのは、京都府の周辺であり、取り扱いは同志社のなかにあった事務所がやったわけです。全国的に一番大きく取り扱ったのは、『国民之友』を発行していた民友社で、額としては京都の本部で集めていた五分の一ぐらいの額になるわけです。すべての申込金額は五万余になるわけ

すが、そのなかの、いわゆる「山城三郡」というのは三十六円の申し込みである。先ほど申し述べた西川義延から始まる七人の人たちがそのうちの二十六円ですから、ほとんど七十%を占めておいて、山城三郡のなかでは一番関心を示していたらうということがいえると思います。

この問題については、先ほど述べた五十円あるいは十五円、百円を納めた人たちのお宅がまだ残っているだろうと思いますし、私は家蔵の文書を調べさせていただくというところまで、まだ到っておりませんけれども、これらの人々の抱いていた意識と運動する同志社の構想との関係を明らかにすることは大きな課題であると思います。

それから、もう一つの田辺と同志社の関係というのを述べることにいたします。それは新島学園長の岩井文男先生から伺った話であります。

同志社がこの田辺の校地を買収をするという段階で、たまたま岩井さんは秦理事長とお会いになった。そのとき、岩井さんが、田辺の校地の付近で私はこういうことをしましたということ秦理事長に話をした。秦理事長

は非常に喜ばれて、同志社がここを占める意義が、あるいは由来があなたによって一つ証明されたと言われたそうです。惜しむらくは秦理事長は亡くなられて、どういってお喜びであったかという実際は聞くことはできません。じゃ、岩井さんは何を田辺でなさったのかということですが、岩井文男さんは群馬県出身で、同志社に入學し、中島重博士の影響を非常に受けるわけです。

労働ミッションと農村伝道

中島重という人は六高、東大を出て、そして海老名弾正の本郷教会に通って、海老名弾正の推薦で同志社法学部の教授になる方で、法哲学の当時日本でも有数の学者であり、同志社の法学部を背負って立つような方なんです。この方は大正六年から昭和四年七月まで、同志社に十二年間教授でいるわけです。

その中島重のところに、大正十四年に賀川豊彦がやってまいりました。そして、いわゆるリバイバルが起きるわけです。信仰復興のエキサイトするなかで、同志社の学生のなかで「雲の柱会」という組織ができます。この「雲の柱会」が実は教職員、学生を中心として

で上がって、翌々年、昭和二年に同志社労働ミッションをつくるわけです。これは中島の当時考えていたキリスト教伝道のひとつの具体的なあらわれであって、どういうことをするのかというと、都市と農村、それからいわゆる社会的な貧困の場所にキリスト教の福音を伝えていこうという計画で、やがて労働ミッションはいわゆるキリスト教学生青年運動、SCMの運動に展開をするわけです。

この労働ミッションのなかに中島重の影響を受けて入っていた人々の中で、三羽鳥を挙げますと、一人は、ごく最近お亡くなりになった、大阪の水戸隣保館で孤児救済をしておられた中村遙さん、もう一人は金田弘義という方で、都市伝道をされた方です。農村伝道を担当されたのが岩井文男さんでありまして、どこにおいでになったかということ、結婚をしてすぐ、奥さんとお二人で草内においでになったんです。

たんばのなかの一軒家をお借りになって、ほんとに献身的な農村伝道をするんです。夜間に農民を集めて集會をもち、説教をし、福音を伝えるわけです。その運動は、やがて先ほど申しましたように、もう一つの流れとし

て、日本労働ミツションに展開いたしました。その日本労働ミツションは、賀川豊彦あるいは杉山元治郎のいわゆる全農の農民組合運動と連動いたします。岩井さんは、だから非常なある意味では危険も冒しながら、この田辺の地域を克明に巡回して農村伝道を行ったわけです。従って、この田辺の地域というのは、同志社の若い人々がほんとうに精魂を傾けて伝道して回った場所なんです。

それに関連して劇的だと思ったのは、中島重という方は、同志社紛争が起きまして昭和四年の七月に解雇されるんです。その解雇されたときに、中島重博士は岩井さんのところに訪ねて行っているんですね。そして、木津川の土手の上で「きょう、バツサリやられたよ」っておっしゃったそうです。慰める言葉もなく、岩井さんは田辺の駅まで送って京都にお帰した。同志社のなかであの時期に起きているのは、いわゆる海老名総長直後の総長問題であり、それからもう一つは岩倉土地問題で理事のなかに紛糾があり、学生がそれを突き上げて法学部が分裂をして、いわゆる法学部の解任教授に反対をするという形で、中島重博士はいわば節を屈しなかったもので

すから理事から解任を命ぜられたわけであります。岩井さんの話によりますと中島重の影響を受けて自分が田辺の、ほんとに水田のなかに足を突っ込んだような格好で伝道をしたというふうなことで、それから、その中島博士が同志社を解雇されてから関西学院においてなるわけですけども、バツサリやられたよっていうときに、岩井さんのところにこられてその話をされたということ。これは私は同志社が田辺と一体どうかかわりをもっているかということに、それは忘れられてしまっていることだと思っております。一九二九年、三十年の段階ですけども、忍び寄るフアンシズムの足音がするなかで、田辺の地域に同志社の学生の、いわば汗や涙がそこに注がれていたということは、これは同志社としてはちゃんと銘記しておかきやならないというふうに思います。

じゃ、先に述べた、いわゆる同志社が大学を設立しようとするのに応じた田辺の空気というものはどうしてあったのかということについては、それが実は、先ほど仲村さんのお話しになった愛民義塾とか、あるいは南山義塾というようなものを建てていった人も、

新島襄研究参考図書

My Younger Days

同志社校友会

新島襄の生涯

(J・D・デイヴィス著・北垣宗治訳)

同志社校友会

新島先生書簡集―続(森中章光編)

同志社校友会

新島襄書簡集(同志社編)

―岩波文庫
岩波書店

新島襄先生(徳富蘇峰著)

同志社出版部

新島襄―人と思想(魚木忠一著)

同志社出版部

新島襄(岡本清一著)

同志社出版部

新島先生と徳富蘇峰(森中章光著)

同志社

同志社九十年小史

(同志社社史史料編集所編)

同志社

雑誌「新島研究」

同志社新島研究会

新島襄(和田洋一著)

日本基督教団出版局

※比較的参照しやすいものを掲載



南山義塾遺跡の碑

実は先ほど述べた同志社の義捐金の募集に応募する人々なんです。彼らは府会議員になり、あるいは衆議院議員になって、しかも、おおむね自由党に属して、自由民権運動を展開するわけです。

新島襄ゆかりの地・南山義塾

同志社とのかかわりのなかでは、とくに明治においては田辺周辺の——先ほどから話の出ている人でいいますと普賢寺出身の伊東熊夫、田宮勇、大住の権井保親、吉田喜内、田辺の西川義延、喜多川孝経、西村篤というような人物は、実は京都に同志社が建てられてい

こうとするときに、やはり私立学校を南山城のなかにつくろうとしている。そしてその南山城につくっていったのは、愛民義塾というようなきわめて平民的な名前のものがある。また南山義塾というような名前をつけて、南山城のいわゆるパブリック・スクールだという、こういう人たちの運動と、新島襄のいわゆる

「良心を手腕に運用する」という、『大学設立旨意』とが共鳴し合って、記録のなかではごく少数の有力者だけですけれども、南山城

地域から同志社大学の設立に対する義捐金が寄せられているということ。いわば新島の掲げた教育立国というふうなものに吸収されていっていいと考えた、南山城の田辺を中心としたそういう人たちというもの……

繰り返しになりますけれども、その中心である伊東熊夫というのは、自分の長男を明治十九年に実際に同志社に入れるわけです。

——郷民の教育機関をつくり、民権運動に参加し、また新島の教育構想に賛同する人々と

のつながり——というものは、いまはたして同志社ほどれだけの責任感もちながら田辺を考え、田辺校地への展開というものを、実際はどんなふうな歴史的由来のなかで考えるかということに私は関心をもちます。

鈴木 ありがとうございます。いまお話いただいた中の南山義塾の跡地ですけども、これはすでに同志社の用地になっているわけです。

杉井 碑が建っておりますね。

鈴木 そうですね。碑が建っていて、現在竹やぶになっていきますね。あの南山義塾の用地を購入するにあたって、亡くなられた秦理事長、非常にご熱心であられたということを伝え聞いているわけです。やはり南山城の地域の人たち、とくに田辺の同志社の用地に近接した地域の人たちは、同志社が設立された当初からかなり支えになっていただいたんだということがよくわかったような気がします。

仲村 このコピーは人文研の高久嶺之介さんのものを拝借してきたんですが、高久さんは京都府下の民党結社の研究をやっておられ、特に山城の自由民権運動が一段落ついた

あとの結社の人脈を詳しく調べ上げていますが、このコピーを紹介申しますと、明治十五年五月三日付の「立憲政党内閣」に、南山義塾の開校式の模様を詳しく報じておるんですね。それには新島襄や立憲政党内閣の総理であった中島信行が出席しています。新島は、教育の法及びその将来の目的等を演説しておるんですね。

これも高久さんに教えていただいたことですが、同志社大学の設立には、新島は境界、財界から寄付金を仰いでおりますけれども、ひとつは自由民権運動の指導的な立場にあらた人たちの援助を多分に受けておる。つまり、逆に言いますと同志社大学の設立には、自由民権運動の運動原理に通じるところがあるということですね。このことは、同志社大学の歴史を振り返ってみるときに確認しなければいけない問題ではないか。これは高久さんの意見だけじゃなしに、私自身もこのことは以前から考えておるんですけれども、とくに南山城に限らず、京都府下の民党結社に加わっておる人たちの援助を非常に受けておる点が大事だと思えますね。

それから、先ほどの普賢寺谷の話ですけれ

ども、普賢寺谷が伊東熊夫、田宮勇を出しておることも、普賢寺谷の歴史にとって非常に注目すべきことだと思えます。この際、同志社の歴史を考える場合には、こういう人たちが持っている文書を公開していただいて、同志社の設立の意味づけを正確に、綿密にする必要があることを、主張したいと思えます。

鈴木 同志社と自由民権運動、ありがとうございます。ごさいました。同志社の校地を中心にして周辺地域の自然と歴史を柱にいろいろお話をちようだいたしたわけです。田辺の地元でいろいろな遺跡を歩かしていただき、また土地の古老と話す機会にいろいろなことを教えられるわけです。大学が教育研究条件を改善して、さらに充実させていく上では、いずれにしても地域社会を十分理解し、あわせて現在の地域の方々と強く協力して、お力をお借りするということも必要かと思えます。いまお話いただいたなかでも、たとえば田辺町に郷土史会というのがございますが、そういう方々の集積された資料なども活用される機会をもちたいというふうにも思えます。同志社校地で出土した資料等につきましては、現

在資料館収蔵庫に収蔵して整理をしている途中でございいますが、いつでも地域の人たちに見ていただけるような配慮をさせていただきます。

なお、同志社の校地のなかにある文化財につきましては下司の古墳群を保存することに決定しましたし、その地域も確定したわけです。天神山遺跡——全国的に知られた高地性集落の遺跡も、遺跡公園として整備する計画もあるわけです。この地域を、同志社が将来大きく発展していく上で十分自然的な環境、あわせて歴史的な環境を尊重しながら活用していただきたいというふうに強く考えるわけです。

まだまだ自然と歴史という大きなテーマですから言い尽くせなかつた先生方もあらうかと思えます。先ほど森先生が指摘されました問題を含めまして、多くの専門の方々のお力をいただきたいと思えます。校地学術調査委員会は、中心を同志社校地に置きながら、関連する地域に広く目を通して資料を集積していきたいというふうを考えております。

(一九七七・九・三十)